Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-14

あとがき

木下，資一

(Citation)
近代,105

(Issue Date)
2011-08

(Resource Type)
other

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003710

あとがき

猛暑が続いています。

今年三月十一日に起こった東日本大震災とそれに伴う津波、そしてこれらによって引き起こされた福島原子力発電所の事故は、平凡な日常のありがたさを改めて感じさせます。亡くなられた方々、被害に遭われた方々には、心よりの哀悼とお見舞いの言葉を献げます。

神戸大学に勤務する我々教員の中にも、十八年前の阪神淡路大震災の記憶を呼び起こされた方は少なくなかったのではないでしょうか。今年の災害は、被災者の数も被害地域の広さも一段と大きく、更に放射能汚染の恐怖と節電の不自由も引き連れている分、一際深刻です。

ある研究会の席上で、『和漢合運』（山崎淳「地蔵寺蔵『和漢合運』蓮体自筆部分－翻刻と解題－」『上方文藝研究』8号・平成23年6月刊、所載）という江戸時代の書物に見える宝永四年（一七〇七）の記事が話題になりました。そこには「十月四日未刻、大地震。畿内事夥。大坂町崩。津浪入人死二万人。駿河、遠江、三河、伊勢、紀州、土佐津浪大来。民屋漂流、死人甚多。地震越年不止。十一月二十三日、江戸、黒沙降積三寸。二十六日、同之、富士山半腹大ニ火出テ焼ルコト十七日」とあります。この宝永四年の冬は、近畿地方を襲った大地震、東海から四国までを襲った大津波、そして富士山の宝永大噴火などが二ヶ月の間に続いて起こりました。専門家には承知のことかもしれませんが、改めて歴史に学ぶことの大切さを痛感しました。

さて今号は投稿少なく、三本の論文で一冊を発行することになりました。三人それぞれ英・仏・日の文化研究を専門とするベテラン教員です。拙稿は別として、お二人の力作の投稿を感謝します。次回は若手の方々の投稿も期待し

ます。

今日は長崎原爆忌でもあります。

彎曲し火傷し爆心地のマラソン

金子兜太

二〇一一年八月九日　編集担当　木下資一